

■「故郷へ」

「ロバと羊と、どっちの生涯がましですかね」

そのドライブの途中、カメラマンは突然私に尋ねた。

「同じ家畜に生まれても、運命の不公平はひどいもんでしょう。ほらあそこの井戸の傍にいるロバは、飼い主と仲良くさぼってるけど、羊は食われちゃうんですからね。ここの連中、ラクダは食いますけどね、ロバを食べたってのは聞いたことないですよ」

あのロバはたまたま寝そべっている飼い主の傍で風に吹かれているけれど、ロバの生涯は楽ではないと思う、と私は言った。大きな荷物を担がされて、ちょっとでも怠けようものなら笞（むち）で打たれて一生を過ごす。それを思うと、短くてもいいから、うんと食べて進んで、それでさっさと殺された方がましだ、という発想もあり得る。

■「沈黙の海」

飢餓は人間の性欲を奪うものではなく、却って生殖の能力を高めるといふ。それは、種が絶える予感によって、その対策を自然に立てるからだといふ。

■「無言の新月」

依田直文には、あまり人に言いたくない趣味があった。

毎日日記をつけるのである。

一時は日記に毎日一句ずつ俳句を添えることにしたこともある。しかしその俳句がまたあまりうまくないとされると、依田は急に自信を喪失して、その習慣はやめてしまった。

しかし日記をつけるのだけはやめなかった。よく続きますね、意志が強いんですね、などと言う人がいるが、直文にとっては、それで心理的なバランスを取っているのである。どんなに遅く帰って来ても、眼鏡をかけ、日記用の大学ノートを広げると、脳味噌の間に昼の間に溜まっていた埃が洗い流せるような気がする。顔の汚れは洗えば落ちるが、頭の中の汚れは書くことでしか落とせないような気がするのである。

友達の中にはまた、妻や娘に日記を見られることを不安がる人もいた。しかしその度に直文は、

「読んでくれたってまず見ないだろうな」

と答える他はなかった。それほど秘密がないということを強調するつもりもなかったが、書いている文章の内容が他人が読んでも別におもしろいことではないのである。

秘密らしいものもない。会社での不愉快な出来事を記録した日があったとしても、誰かを強烈に非難しているような文章を書いたことはなかった。

■「無言の新月」

(シンガポールに親子で観光)

喧嘩の発端は、ごくつまらないことだった。春菜が直文に雑誌の広告ページに載った一枚の写真を見せて、

「お父さん、このハンドバッグ、どう思う？」

と聞いたのである。

「そうだな。少しおもしろみが足りないな。こんなオーソドックスな形なら、日本にいくらでもあるだろう」

それは、確信があって言った言葉ではなかった。直文にすれば、感想を言えと言われたのだから、何か言えば義理は済む、という感じのものであった。

「それだから、お父さん、だめなんじゃないか。これ持ってたら、一目でリカルドのハンドバッグだってわかるんだよ。しかも日本だったら二十五万円もするんだから、誰でも欲しかったってなかなか買えないのよ」

「二十五万円のハンドバッグを買うつもりか」

「そうだよ。どうして？ だってシンガポールにはショッピングに来たんだもの」

「お母さん、春菜にそんな高いハンドバッグを買ってやるつもりか」

「こっちならそんなにしないわよ」

「ブランドものは、ほとんど日本と値段の差がないって、唐沢さんの奥さんが言ってたじゃないか」

「でも、こんなこと、いつもあるわけじゃないし、シンガポールの思い出と青春の思い出に、一度くらいはいいじゃないの」

「いけない！」

大きな声を出したのは、直文の方だった。それは珍しいことだった。

「まだ学生の身分で、ふざけたことを考えるな」

「お父さんは、いつでも私のこれと思う楽しみをぶち壊すのよ」

春菜は感情が高ぶって泣き声になった。

「何のことだ。俺はお前のしたいようにさせて来た。いつ楽しみをぶち壊した！？」

「自転車部の遠乗りの時、行かせてくれなかったじゃないか」

「自転車が危険だからだ。ことに一般道路でしかもトラックが多い道を、自転車の遠乗りなんて許すわけにはいかない」

「このバッグを買うことも、楽しみにして来たんじゃないか！」

春菜は泣き叫ぶような声になった。

「くだらない楽しみだ。お前のようなばかがいっぱいいるから、日本はだめになるんだ」

「皆、買ってるよ。堺さんだって買ったよ。篠田さんのお父さんだって、この間パリからスワツソンのバッグ買って来てくれたんだって。スワツソンなんて、五十万円もするんだよ」

人のうちは人のうちだ、と言おうとして、直文はもうその気力を失いかけているのを感じた。

「お父さん、なにもハンドバッグ一つのことでは日本の将来にまで話をおおげさに広げなくていいじゃないの」

これが他家の喧嘩だったら、ここで直文は笑い出したに違いないところだった。しかし直文は今、妻と娘が、自分とは遠い土地、もしかしたら違う星に立っているような気さえしていた。

「それにハンドバッグは、別にあなたのお金で買うんじゃないのよ。北海道のお祖母ちゃん

が、お小遣いにくれたお金なんだから、別に気にしなくていいじゃないの」

「人の金ならいい、ということじゃない」

「どういうこと？ それ」

「人の金なら、そういうばかなことに使っていいということじゃない」

「だけど、そんなことを言ったら、人のお金の使い方まで規制することになるじゃないの。

春菜はお祖母ちゃんにハンドバッグを買っていいですか、って聞いたのよ。そしたら、ああ、いいよ、お祖母ちゃんが買ってあげるよ、って言ったんですもの。春菜にしたら筋を通したと思って当然なんじゃない？」

少しニュアンスが違うのだ。それは金の所属の問題ではなく、人間の生きる価値をどこに見つけるかという美学の問題なのだ。しかし確かに人の価値観を決定的に変えさせる必要もないし、またそれはできることではないのだろう……。

植物園を歩いている間も、直文はずっと一人一人の人間の間横たわる心理の距離のようなものを感じていた。それは、たとえ妻子の間であっても、その距離を埋めることは不可能だと思わせるほど、深く遠いものであった。自分だけではない。誰もが、そのような孤立の中で生きているのだろう。そしてそのような孤独があるからこそ、人は一人で生き、一人で死ぬことを肯じるのだろう。